

診療データベースからみた 難治性重症筋無力症の疾病負荷

Murai H, Hasebe M, Murata T, et al.

Clinical burden and healthcare resource utilization associated with myasthenia gravis :
Assessments from a Japanese claims database.

Clin Exp Neuroimmunol. 2019 ; **10** : 61–8.

Abstract

目的 日本人患者における難治性重症筋無力症(MG)と非難治性MGの疾病負荷の比較

方法 このレトロスペクティブ観察試験には、日本の保険請求に関する大規模データベース(2008年9月1日～2016年10月31日)の成人を登録した。登録条件は、同じ脳神経内科医がMGの分類コードで2回以上保険請求をしており、MGに関する最初の請求から12ヵ月間登録が連続している場合(非難治群)または最初の請求が難治性疾患の条件を満たす場合(難治群)とした。MGの疾病負荷の対照としてパーキンソン病のコホートをを用い、MG患者とマッチ(性別、年齢、基準日)する患者構成にした。評価項目には、呼吸不全、筋無力症の増悪、外来および救急診療の受診、入院を含めた。

結果 12ヵ月間で呼吸不全(17.0%と5.5%, $P<0.001$)および／または増悪(57.6%と5.8%, $P<0.001$)を経験した比率は、難治群($n=165$)が非難治群($n=3,137$)より有意に大きかった。入院回数(0.68と0.09回/年)、救急診療の受診回数(0.07と0.03回/年)および外来受診回数(16.79と11.88回/年)および入院日数(22.19と2.81日/年)の平均値も難治群で有意に大きかった(いずれも $P<0.001$)。救急診療の受診を除き、医療資源の利用は、パーキンソン病($n=3,168$)より非難治性MGのほうが有意に多かった。

結論 日本人において、難治性MGは非難治性MGより臨床負荷が大きく、医療資源の利用が多かった。

Recommended Readings

